

選択課題2 福澤諭吉が現在の日本を見たら

佳作

「文明」未だならず

福澤諭吉の文明観から見た現在の日本

加藤初穂

(愛知県／聖霊高等学校三年)

福澤諭吉は、幕末から明治時代後半にかけ活躍した思想家であり、「西洋文明の東道者」^{〔1〕}として封建制の支配する「半開」の江戸時代から、西洋を範とした「文明」の状態に日本を脱皮させるべく著述、教育活動を行った。福澤の関心は、近代国家の条件である文明の在り方を示し、日本人に対して近代国家における主体者としての独立の精神を養わせることにあった。福澤の死後一五年の間に、日本は目覚ましい変化を遂げた。私たちは、急速な変化の中を漠

然とした不安に覆われながら生きている。こうした変化の時代の中で、その始まりであった明治の時代に「文明」の在り方を説いた福澤の思想を振り返ることには、大きな現代的意義があるだろう。この論文では、福澤の著作を通じてその思想を振り返り、その上で福澤が現代の日本、そして私たち日本人に対して何を訴えるかを考えてみたい。

そのためには、まず福澤の思想を整理しておく必要があるだろう。福澤諭吉は江戸

時代末期の一八三五年に中津藩の下級藩士の子として大阪に生まれ、自ら蘭学や英語を学ぶことで、学問を通じて時代の先駆者となった。少年時代の福澤の、藩主の名の書かれた紙をうっかり踏んで怒られ、それに反発して神様の名を書いた紙をわざと踏みつけたり、神社の御神体が石であることを知って、これを他の石と交換して神罰のないことを確かめたりといったエピソードからは、彼の旧来の価値観や判断基準にとられない合理的な考え方や実証的態度、封建的身分制度に対する反骨心などがすでにうかがえる。成長し、自ら蘭学や英語を身につけ、三度にわたる渡洋を実現させた福澤は、後年『学問のすゝめ』で自ら説くことになる学問を通じた独立を、自ら体現していた。権力に対しては常に距離をとり、明治維新後は新政府からの出仕要請も断って、在野の学者として日本の進むべき道を示し、その担い手を育てるための教育活動を行ってきた。そのために、慶應義塾を創設し、一八七二年には『学問のすゝめ』を刊行し、『時事新報』では不偏不党の編集方針を貫いて人々の教化に努めてきた。小泉信三が「福澤の功業として第一に傳ふべ

きは、科学主義の確立と独立の精神の振作とに在った²⁾」と述べている通り、そうした活動を通じて福澤が最も重視したのは、主体性を持った個人の独立であったといえる。

福澤の活躍した一九世紀後半は、欧米列強による帝国主義の最も盛んな時代であった。東アジアの大国であった清がアヘン戦争でイギリスに大敗を喫したことは、幕末の日本人に大きな衝撃を与え、欧米列強の脅威から日本を守るべく明治維新による近代国家建設が始まった。そんな中で生きた福澤論吉の関心も第一には日本の独立を守ることにあり、『学問のすゝめ』の中でも「我日本人も今より学問に志し、氣力を慥かにして先ず一身の独立を謀り、随って一国の富強を致すことあらば、何ぞ西洋人の力を恐るるに足らん。……一身独立して一国独立するとはこの事なり。」³⁾として、個々人が独立して政府に対し対等な者として国を担うことを目指すものであった。『文明論之概略』で「開闢の初より今日に至るまで、全日本国中に於いて独立市民等の事は夢中の幻に妄想したることもある可からず⁴⁾」という表現をしていることから、福

澤が目指したものは欧米型の市民社会であったことは明らかである。

福澤にとつての「文明」とは、そうした個の独立を基盤とする市民社会であった。その「文明」は、「国の文明は形をもつて評すべからず。……人民の氣風すなわちこれなり⁵⁾。」という彼の言葉から明らかなように、物質的な「外の文明」ではなく、「内に存する精神」であり、福澤はそこにこそ日本の後進性を認め変革を迫ったのである。その原因を福澤は、「そもそも我が国の人民に氣力なきその原因を尋ぬるに、数千百年の古より全国の権柄を政府の一手に握り、武備文学より工業商売にいたるまで、人間些末の事務といえども政府の関わりざるはなく、人民はただ政府のそうするところに向かつて奔走するのみ。あたかも国は政府の私有にして、人民は国の食客たるが如し。」と指摘し、そのような封建体制の担い手としての幕府を批判したが、同時に明治維新を行った勢力についても、もともととは「勤王派の挙動を見れば、幕府に較べてお釣りの出るほどの鎖国攘夷、もとよりコンナ連中に加勢しようとは思ひも寄らず⁶⁾」と不信感を抱いていた。明治政府につ

いても、その性格を「近日に至り政府の外
形は大いに改まりたれども、その専制抑圧
の氣風は今なお存せり。人民もやや權利を
得るに似たれども、その卑屈不信の氣風は
依然として旧に異ならず。」と断じている。
しかしその後の尊攘派の開国路線への転
換、国会開設といった流れを受けて、その
心境が「政府の開国論が次第々々に真成の
ものになって来て、一切万事改進ならざる
はなし、いわゆる文明駭々乎として進歩す
るの世の中になったこそ実に有り難い仕合
せで」というものに変化したことが、自伝
の中で述べられている。福澤は晩年に至り、
彼の目指す「文明」への道が軌道に乗った
という確信を抱いていたように思われる。

しかし、福澤没後の日本がたどった道は
彼の目指した「文明」とは異なるものだった。
明治以降太平洋戦争の敗北に至るまで、
日本の産業や経済は欧米列強の後に倣い進
歩していった一方で、福澤の重視した「内
に存する精神」としての「文明」はむしろ、
復古を旗印とする明治維新の流れを汲ん
で、「政祭一途に出るの趣意を以て世間を
支配することあらば、後日の日本も亦なか
る可し。」という福澤の言葉の通りになっ

ていった。大江健三郎は『あいまいな日本
の私』の中で明治以降の日本の歴史を評し
て、「日本の近代化は、ひたすら西欧にな
らおうという方向づけのものでした。しか
し、日本はアジアに位置しており、日本人
は伝統的な文化を確乎として守り続けもし
ました。そのあいまいな進み行きは、アジ
アにおける侵略者の役割にかれ自身を追い
込みました。」と述べている。ここでいう、
ひたすら西欧にならおうとする近代化と
は、福澤の言葉を用いれば「外に見はるる
事物」であり、伝統的な文化は同じく「内
に存する精神」に相当するだろう。福澤は
「外の文明はこれを取るに易く、内の文明
はこれを求むるに難し。」として、「欧羅巴
の文明を求むるには難を先にして易を後に
し、先づ人心を改革して次いで政令に及ぼ
し、終に有形の物に至る可し。」としてい
るが、日本はこれとは逆の道を歩んできた
と大江は指摘しているのである。

一般的に、日本は敗戦を機にアメリカに
より民主化され、今の日本が民主主義社会
であることを否定する日本人は少ないだろ
う。では、福澤の目指した「文明」は戦後
の日本において確立したのだろうか。大江

健三郎は『あいまいな日本の私』の中で、「日
本の経済的な大きな繁栄は……日本人が近
代化を通じて慢性の病氣のように育ててき
たあいまいさを加速し、さらに新しい様相
を与えました。」と述べ、明治以来の「あ
いまいな」近代化の在り方は、今でも続い
ているという立場を示している。この指摘
は、敗戦を機に日本が民主化したと信じて
いる私たちにとって、衝撃的なものと言
ってよいだろう。

こうした考えは、大江だけにみられるも
のではない。カレル・ヴァン・ウォルフ
レンは、『人間を幸福にしない日本という
システム』の中で現代の日本について「日
本においては、民主主義は可能性にとどま
っている」と述べている。それによれば、
現在でも日本には政治的勢力としての中間
層が存在せず、明治政府の国民不信を背景
に構築されていた、選挙で選ばれた政治
家が把握できないような複雑な官僚機構と
政治的説明責任の不在が国民の政治参加を
妨げ、さらに政治の主体者となるべき中間
層が仕事にほとんどの時間を拘束され、政
治に参加する可能性をも奪われているとい
うのである。そして、そうした状況を変え

させてこなかったものが、国民の「シカタガナイ」という意識であり、権力が国民に与える「偽りのリアリティー」であると彼は指摘する。例えば、国民の政治参加を難しくしている異常なまでの会社との結びつきは、一つには経済発展という、それ自体が説明不要なものとして受け入れられている目標や、「日本人は集団志向で、調和を重視する」という日本文化論に支えられてきたが、これらはいずれも「偽りのリアリティー」であるというのである。経済発展という目標は、大戦後の経済が破たんした状態にあつては確かに必要なものだったが、ヨーロッパである程度の経済復興を果たした後に国民的議論を経て福祉国家への路線変更が行われたのに対して、日本ではこの議論が行われないうまま、一九五〇年代の政策をそのまま続けて現在に至つていて、経済大国化という国策が国民によって検討の対象となることすらなかったという。その結果、果てしない工業生産のために個人の自由や権利が侵害されることを国民自身が「シカタガナイ」という言葉で容認してきた。その「シカタガナイ」という考えをもたらししたもの、やはり偽りの「リ

アリティー」の一つである「日本文化」の概念だったとウォルフォレンは指摘する。それによれば、日本が世界の中で特別に調和した国であるというイメージがマスコミや教育によつて繰り返し刷り込まれる結果、この考えは日本人の集合意識に深く根付いていて、議論が起ることを妨げているというのであり、実際には日本における「調和」はむしろ様々な不調和を表面化させないための抑圧の結果に過ぎないというのである。その上で彼は、日本人に対して「シチズンシップ」を守ることを訴えているが、これは明治時代に福澤が目標とした個人の独立と同義であると言えるだろう。ウォルフォレンと福澤の目指すところが重なることは、ウォルフォレンが「偽りのリアリティー」に抵抗した数少ない知識人の一人として福澤の名を挙げていることから明らかである。

今の日本社会では、福澤やウォルフォレンが目標として掲げた市民社会が成熟しているとはいへないのは確かだろう。沖縄の米軍基地問題や原発の再稼働の是非、集団的自衛権の行使容認などに関わる議論の中で、それに反対する市民の声は大きくは広

がることはなかった。「政は一国の働きなり。この働きを調和して国の独立を保たんとするには、内に政府の力あり、外に人民の力あり、内外相応じてその力を平均せざるべからず。」と福澤が述べた国民の力と政府の力のバランスを、日本の社会は今なお欠いているのではないだろうか。福澤がその様子を見れば、「日本にはただ政府ありて未だ国民あらず¹⁹⁾」という明治時代に語った警句を繰り返すことだろう。

国民の独立という点については、福澤の時代と現代の時代背景が異なることも理解しておく必要がある。福澤は著書の中で、「内国にあつて民権を主張するは、外国に對して国権を張らんが為なり²⁰⁾」として、民権に對して国権が優先されることを明言している。この意味では福澤は国権論者であり、その点に関して批判されることもある。しかし、福澤の生きた一九世紀は帝国主義の時代であり、欧米列強が東アジアに手を伸ばす中で福澤が一国の独立を最大の目的としたことは当然であつたろう。最近まで、国際社会の中での対立とは国家間の対立と同義であつた。しかし、二〇〇一年の同時多発テロを一つの転換点に、紛争は国家間

の対立から、国境を超えたテロリズムが中心となった。それ以外にも、環境問題や全世界的な経済危機など、二十一世紀の問題は従来の国民国家の枠組みを超えたものになり、ウーリッヒ・ベックは「グローバル化された世界において、自分のナショナルな問題を解決するために、自己決定権をある程度放棄するといけない²²⁾」と指摘している。イギリスのEU離脱にもみられるように、国民国家の枠組みを超えることは困難を伴うが、現実に進むグローバル化の中では従来のような国権論は西洋でも時代遅れになりつつある。「昔年の異端妄説は今世の通論なり、昨日の奇説は今日の常談なり。然ば即ち今日の異端妄説も亦必ず後年の通論常談なる可²³⁾。」と述べていることからわかる通り、福澤は柔軟な思想の持ち主で、当時の西洋の思想が普遍的な真理だとは考えていなかった。そのような福澤であれば、民権と国権の関係も新しい条件のもとで柔軟に再考することであろう。

そうしたグローバル化に伴う民権と国権の関係の変化について、ウーリッヒ・ベックはグローバル社会が、自然や伝統などの安全が失われた「リスク社会²⁴⁾」であると指

摘している。そのような社会の中にあつては、個人と国家の関係もまた変化する。姜尚中は、グローバル化に伴つて「保守的な価値の復権に訴えることで、文化的アイデンティティを体现している政治的コミュニケーションとの自己同一化を促そう²⁵⁾」とする心理が働く²⁶⁾と指摘している。このことは、上述のような今の日本の市民運動が起きようとしたときに、インターネットを中心にして一般国民の間から冷笑と非難が浴びせられたことに表れているだろう。福澤が日本の悪弊とした権力の偏重は依然として日本社会の特徴であり、それはむしろグローバル化を背景に強化される傾向にある。しかしこのことは、福澤の目には彼が最も重視した個人の独立心を奪うものと映ることだろう。福澤は「人民もし暴政を避けん²⁷⁾と欲せば、速やかに学問に志し、自ら才徳を高くして、政府と相対し、同位同等の地位に登らざるべからず²⁸⁾」と述べている。今求められることはむしろ、学問を通じて独立心を養うことであり、権力への追従ではないと、福澤は強調するに違いない。

以上のことを踏まえ、「福澤論吉が現在の日本を見たら²⁹⁾」という問いに答えるなら

ば、福澤は我々現在の日本人に対して、「独立心」を養うべきことを一層強く主張するだろう。進歩主義者であつた福澤にとって、彼の没後から現在に至るまでの日本の歴史は、大きな失望であらうと思われる。福澤が日本人の顕著な気風であるとした権力の偏重は、その現れ方こそ明治から現在にかけて様々に変化してきたとはいえ、依然として日本社会の大きな特徴であり続けている。明治以後も、日本社会は「外の文明」は熱心に吸収しても「内に存する精神」は吸収しないまま現在に至つてしまった。むしろ、自由民権運動が国民的な運動として盛り上がった明治時代に比べ、市民の政治参加が極端にみられない今の日本は、福澤にとつては自らの時代よりも後退しているようにすら感じられることだろう。

明治時代に、福澤は「独立心」を養わせるため教育に力を入れた。その背景には、多くの困難を自力で乗り越え学問を積み重ねることで運命を切り開いてきた福澤の経験があるだろう。私たちは今、一見穏やかで安定した社会の中で漫然と教育を受けてしまつてはいないだろうか。社会に関心をもち、自ら考えるために学び、行動すると

いう姿勢は、受験のための勉強、就職のための大学生活、従順な日本人としての職業生活という日本人の多くがたどる生活の中で、失われているように感じる。しかし、「独立心」は学問によって養われるものであるとする福澤であれば、まず私たちに對してもっともつと学びに貪欲になることを説くのではないだろうか。IT化の中で、私たちは自ら情報を求め、考えることをしなくなっている。福澤が生きた時代に比べれば、今私たちが得ることのできる情報の量は比較にならないほど大きい。しかし、それはあくまでも「外の文明」の成果であり、「内に存する精神」は自ら学び考えることによつてしか得られない。学ぶことを通じて独立心を身につけることで、福澤が明治時代にその実現を説き、今に至るまで日本が置き去りにしてきた「文明」は完成するのではないだろうか。

参考文献

カレル・ヴァン・ウォルフオレン 著（篠原勝 訳）一九九四年『人間を幸福にしない日本というシステム』毎日新聞社
姜尚中著 二〇〇六年『愛国の作法』朝日

新聞社

清原伸一編 二〇〇六年『日本の一〇〇人 福澤諭吉』デアゴスティーニ・ジャパン
小室正紀編著 二〇一三年『近代日本と福澤諭吉』慶應義塾大学出版会

福澤諭吉著 一八七八年『通俗国権論』慶應義塾出版社
福澤諭吉著 一九三一年『文明論之概略』岩波書店

福澤諭吉著 一九四二年『学問のすゝめ』岩波書店

(1) 小泉信三『福澤諭吉 人と書簡』、新潮社、一九五五年、五九頁

(2) 小泉信三『福澤諭吉 人と書簡』、新潮社、一九五五年、二〇頁

(3) 福澤諭吉『学問のすゝめ』、岩波書店、一九四二年、二八頁

(4) 福澤諭吉『文明論之概略』、岩波書店、一九三二年、一九五頁

(5) 福澤諭吉『学問のすゝめ』、岩波書店、一九四二年、四八頁

(6) 福澤諭吉『学問のすゝめ』、岩波書店、一九四二年、四八頁

(7) 福澤諭吉『福翁自伝』、岩波書店、一九七八年、三五九頁

(8) 福澤諭吉『文明論之概略』、岩波書店、一九三一年、三八頁

(9) 福澤諭吉『福翁自伝』、岩波書店、一九七八年、三六〇頁

(10) 福澤諭吉『文明論之概略』、岩波書店、一九三一年、三六頁

(11) 大江健三郎、『あいまいな日本の私』、岩波書店、一九九五年、八頁

(12) 福澤諭吉、『文明論之概略』、岩波書店、一九三一年、二七頁

(13) 福澤諭吉、『文明論之概略』、岩波書店、一九三一年、二七頁

(14) 福澤諭吉、『文明論之概略』、岩波書店、一九三一年、二七・二八頁

(15) 福澤諭吉、『文明論之概略』、岩波書店、一九三一年、三一頁

(16) 大江健三郎、『あいまいな日本の私』、岩波書店、一九九五年、一一頁

(17) カレル・ヴァン・ウォルフオレン、『人間を幸福にしない日本というシステム』、毎日新聞社、一九九四年、二〇頁

(18) 福澤諭吉、『学問のすゝめ』、岩波書店、

一九四二年、三六頁

(19) 福澤諭吉、『学問のすゝめ』、岩波書店、

一九四二年、四一頁

(20) 福澤諭吉、『通俗国権論』、慶應義塾

出版社、一八七八年、七頁

(21) ウーリッヒ・ベック『世界リスク社

会論』、筑摩書房、二〇〇一年、五三

頁

(22) 福澤諭吉、『文明論之概略』、岩波書店、

一九三一年、二二頁

(23) 姜尚中、『愛国の作法』、朝日新聞社、

二〇頁

(24) 福澤諭吉、『学問のすゝめ』、岩波書店、

一九四二年、二六頁